

# 半島における屋内神の研究

—オシラサマをめぐる—

諸岡 道比古

## はじめに

青森県のほぼ中央部に位置する夏泊半島は、東、西そして北を陸奥湾に、南を八甲田山系に囲まれている。その陸奥湾の東側と北側には下北半島が、西側には津軽半島が位置している。行政区画としては夏泊半島は平内町に属し、半島の付け根部分に平内町小湊があり、そこに町役場をはじめとした各種機関が集中している。

平内は、明治の廃藩置県により、黒石藩領から青森県第一大区七小区に組み込まれたが、1889年（明治22年）4月1日市町村制実行によって、小湊村他26ヶ村が分合され、6ヶ村からなる東平内村、12ヶ村の中平内村、9ヶ村の西平内村という3つの平内村に分けられた。1928年（昭和3年）10月1日には中平内村が小湊町になったが、1955年（昭和30年）3月31日には町村合併促進法によって東平内村、西平内村そして小湊町とが合併し、平内町となり、現在に至っている<sup>(1)</sup>。

今回調査を行った夏泊半島の集落は、町村合併促進法施行以前の行政区画でいえば、小湊町と西平内村に属し、小湊町の大字浅所、白砂、東滝、東田沢、大字東田沢字野内畑と西平内村の大字稲生、茂浦そして大字茂浦字浦田とである。それぞれの集落は、やや内陸部にある野内畑と後背地をいささか広く持つ浅所を除き、陸奥湾に面し背後には山がすぐそこに迫っている立地条件の中で形成されて、漁業を中心とする生業を営んでいる。その立地条件が生活環境を規定するのはいうまでもないことであるが、その条件こそが風光明媚な景観を生み出し、半島を心ゆくまでのんびりと旅するように誘いもする。東北遊覧の旅日記を残した菅江真澄は、彼の「津可呂の奥」によれば<sup>(2)</sup>、寛政7年（1795）3月22日から27日にかけて夏泊半島の半島東側を北上し西側を南下する形で旅をしている。今回の調査地域を彼は浅所、福館、間木、滝、弁慶内（現在は地名のみ残っている）、野内畑、田沢、稲生、浦田、茂浦、と記した順で旅している。「津可呂の奥」や「外が浜づたひ」などその旅日記の中で、現在の平内町と関連する多くの記述がなされている。多くの記述がなされてはいるけれども、今回の宗教調査との関連で言えば、たとえば、田沢の椿明神に関する伝承への言及はあるものの、オシラサマに関する記述は残念ながらなされていない。記述がないからといってその当時オシラサマが存在しなかった、などという暴論をはくつもりはまったくないが、菅江真澄が旅した地域と重なり合う夏泊半島の諸集落における、現在の時点で確認することのできるオシラサマに関する覚え書きを残すことにする。

## 1. オシラサマの形態と信仰機能

夏泊半島の集落でオシラサマ、オシラサン、シラガミサマ、シラカミサマと呼ばれている像は、様々な形態をしているが、背丈はおおよそ 30 センチメートル（一尺）前後、太さは直径 3 センチメートル（一寸）程度で、二本を一組とする男と女の木像である [オシラサマに関する名称のうち、本稿では夏泊半島で一番聞かれたオシラサマを用いることにする。その他の名称が用いられる場合は、話者ならびに研究者が用いている用語をそのまま引きついたものである]。このオシラサマをめぐる信仰つまりオシラサマ信仰に言及した学者は、たとえば、オシラサンを不動 [明王] の変形と考えたオシラサマ研究の先駆者である宗教学者・姉崎正治、『日本風俗志』上、中、下、三巻を書き表しオホシラ神が北海道アイヌがまつる神とする加藤咄堂、オシラサマはアイヌの神ではないと加藤説に反論するアイヌ研究者の金田一京助、オシラ神をアイヌの神とする喜田貞吉、喜田説に反対し『大白神考』などでオシラ神信仰をわが国固有の信仰の一つとする民俗学者・柳田国男など、数多くの研究者がいる。このような研究者の諸説を検討し、諸説の論点や差異を明確化し、夏泊半島に見られるオシラサマ信仰の現状と比較検討することは興味深いことである。しかし、ここではこのような道をとらない。むしろ、「喜田説でも、柳田説でもないオシラサン説を主張」し、オシラサンを「喜田氏や金田一氏の言うアイヌのチセコロカムイと同一のものでないのと同様に、柳田氏が想定された、我が国固有の古代神的なものでもなく、また「金田一氏や姉崎氏の言う、インド的経典仏そのものではない」が、「和人の祀る神の一つ」である、「アイヌ・和人型文化の中に形成された」様々な要素が融合したオシラサンに関する信仰現象である (270)、と主張する楠説<sup>(3)</sup>を参考に、オシラサマを考えていくことにする。それというのも、昭和 26 年の調査開始以来、昭和 59 年まで（『庶民信仰の世界』発刊年。その後現在に至るまで調査は続けておられる）、地道にしかも足繁く青森の地に足を運び、「信仰動態現象学」を構築するために、下北半島ならびに津軽半島の信仰現象を実地踏査された楠が、唯一調査し残した夏泊半島の調査を行うことにより、青森県における「オシラサン信仰」研究の補充の意味もあるからである。

オシラサン信仰は「基本となる経典も教義も、教祖も開祖もない。そればかりか、仏、菩薩、明王、四天、あるいは神々に比較すると、その特性や神格が明瞭でないばかりか信仰対象の名称も知られていない状態である。しかし、オシラサンは、本来、芸術作品として制作されたものではなく、また、家具や仕事の道具、あるいは、おもちゃとして作られたものではない。しかし、それは何か神秘的な、神力を有するものとして、祈られ、祀られる」(233) と楠は述べ、この不思議な神の信仰現象からオシラサンの本質を尋ねようとする。楠はまずオシラサンの形態を、

- 1) オシラサンの顔が人間の顔をしている人頭型オシラサン
- 2) 男の顔が馬の頭であり、女の顔が人間の姫の顔である馬・姫型オシラサン
- 3) 男女二体が両方とも包衣に覆われている包頭型オシラサン

4) 男が包衣につつまれ、女が顔を出している半貫頭型オシラサン  
の四種類に分ける。このような形態の分類からすると、夏泊半島で目にするオシラサマは、視認できた限りで、すべてが 3) の「男女二体が両方とも包衣に覆われている包頭型オシラサン」であり、4) の「男が包衣につつまれ、女が顔を出している半貫頭型オシラサン」でないことに間違いはない。しかしながら、これらのオシラサマが「人頭型オシラサン」であるか、「馬・姫型オシラサン」であるかを、包衣をはぎ、直接視認して確認させてもらうことはできなかった。オシラサマを所有している家の方の証言から、東田沢、稲生、茂浦に「馬・姫型オシラサン」があることがわかるが、男の神様、女の神様と語られることから人頭型か、馬・姫型かを聞き出すことは困難であった。言うまでもなく、これは、楠が記してように、自分の信仰対象であるオシラサンがどんな型のものであるか知っている人が少ないことと、たとえ知っていたとしても、自らの信仰対象について外部の者に話さないのが普通である、と思われるからである。またオシラサマの姿を普通の人は絶対見てはいけない、とされていることがあげられる。この点はともあれ、楠の分類からすれば、夏泊半島のオシラサマはすべてのオシラサマが 3) に分類されるとともに、1) ないし 2) の顔をした男女一対の神様ということができる。

次に楠は、現在東北地方で祀られているオシラサンが「現象面から考察して」「不動や馬鳴と複合したものはない」(271) とし、東北地方のオシラサンが関東地域に見られる「養蚕神としての『馬鳴・オシラ神』」であることを否定するとともに、岩手県の一部に見られるオシラサンは「不動明王とかカノキヂンシヨ（桑ノ木地蔵）」とよばれるが、「オシラサンのもつ経験的信仰機能は、変化することなく、不動明王や地蔵尊の名称が書き加えられたもの」(272) とし、経典仏ではないとする。さらに福島県に見られるオシラサマは神道化されただけであり、その経験的機能は変わっていないとして教典神ではないとする。このように現象面から考察した楠は、オシラサンの持つ経験的信仰機能から、従来言われているオシラサマが養蚕の神であることや不動明王の変化したものであることを否定する。夏泊半島で見られるオシラサマは「カンの木（桑の木）」あるいは「オシラサマになる木」「オシラサマの木（桑の木）」から作られているが、だからといって桑の木が群生していたり、桑の木を必要とする養蚕が半島の集落で行われていたりした形跡はない。また、オシラサマを所有している人々が、オシラサマは養蚕の神である、あるいはオシラサマは不動である、はたまたオシラサマは・・・神である、と語ることはなく、神棚にはオシラサマとならんで竜神様、稲荷様、不動明王など一緒に祀られている。なかでも竜神様とともにオシラサマが祀られている場合が多い。ただ、オシラサマを「火をカブル神様」と表現したり、あるいは、「船で火事が起きたが、大事には至らず、鎮火した後でオシラサマを見たら黒い油にまみれていた」、と語り、大事に至らなかったことをオシラサマのおかげ、という意味で、あるいは「オシラサマは火事の時に駆けつけて戸を開いたりして人を助ける」、とオシラサマを火事に関係する神と言う人もいる。だからといって、た

例えば、火伏せの神である秋葉神社や愛宕神社などで祀られるカグツチである、と言うことは決してなかった。楠が東北地方で祀られているオシラサンについて先に、養蚕神でもなければ經典仏や教典神でもない、と述べたように、夏泊半島のオシラサマも養蚕神でもなければ經典仏や教典神でもない。

このような經典仏でも教典神でもなく、養蚕神でもない東北地方で祀られているオシラサンの祭日は、「原則的には、正月、三月、九月、あるいは十一月一六日である」、と楠は語る。特に「三月と九月の一六日は、農神の祭日であって、この日はオシラサンの祭日と重<sup>た</sup>かってくる。このことから、オシラサンは農神ではないであろうかという推定が出てくる。形式的に考える場合には、やむを得ないことであるが、・・・オシラサンは、農神の祭日と同じ日に祭りがあがるから、農神であると推定することは誤りである」(279)、と楠は述べ、柳田の主張である、オシラサンと農業神との関わりを否定する。そして職能神としての農業神であることを否定する。夏泊半島でオシラサマを祀っている人に尋ねたところでは、「オシラサマの日」、「シラガミサマの日」、「オシラサマの縁日」という表現で示されたものは、「毎月十六日」というものであり、農神の祭日と重なる点が見られはする。現在、内陸部の野内畑をのぞく各集落はホタテ養殖を中心とする漁業で生計を立てており、農業を生業としているのは野内畑だけであるが、昭和 20 年代頃までは、むしろ逆で、炭焼きを中心とする野内畑をのぞく各集落で田畑が作られていたので、農神との関係を指摘できるかもしれない。しかしながら、後述することになる夏泊半島のオシラサマの特徴と思われる「サンヅク」との関係から、こうした指摘はまったく成り立たないと思われる。また、イタコが来てオシラサマを遊ばせた月日から、3月あるいは9月を特定しようとしても、それもまた困難である。オシラサマ遊ばせをしたのは3月ないし4月、4月、1月8日、春と秋の彼岸、という月日に言及したものが各々1件あっただけであるからである。それというのも、一番最近イタコあるいはカミサマが集落に来た日時を述べている人ですら昭和が終わる頃以前とし、記憶が定かでないためと思われるし、先の「サンヅク」と関係があると思われる。

これまでのところ、楠が調査した下北半島や津軽半島に見られるオシラサンと夏泊半島のオシラサマとは、形態においても、經典仏や教典神でないことにおいても、農神でも養蚕神でもないことにおいても一致している。次節ではオシラサマがどのように祀られるか、ということを見ていくことにする。

## 2. オシラサマの起源と祭祀

夏泊半島で現在（平成17年12月現在）確認されているオシラサマは26対であり、オシラサマを祀っている家は24軒である。オシラサマを2対祀っている家が2軒ある。詳しく見ると、浅所1軒、東滝1軒、白砂2軒、東田沢4軒（うち、1軒で2対祀っている）、野内畑2軒、稲生4軒（うち、1軒で2対祀っている）、浦田2軒、茂浦8軒であ

る。26 対のうち、「馬・姫型オシラサン」である、との証言をえたものは4対あり、男の神様と女の神様とする表現をえたものは4対である。これら8対を含め、26対すべてのオシラサマが「包頭型オシラサン」である。

これらのオシラサマの起源を、楠の分類つまり

- 1) 「昔から家にあった」ものをW型
- 2) 「イタコからもらった」ものをX型
- 3) 「他家から預かった」ものをY型
- 4) 「病気をなおすために作った」ものをZ型

によって分けると以下のようになる。W型に分類すればしうるものが4対、それも話者が嫁に来た当時あったというものにすぎず、話者の生年（大正5年生まれで17歳で嫁ぐ、大正10年生まれで20才で嫁ぐ、昭和2年生まれで16才で嫁ぐ、昭和2年生まれ女性）からして、また1対のオシラサマを除いて家のオシラサマは古いものである、とすることがないことからして、さほど古いものとも思われない。ただその1対は「何代も前から伝えられたもの」とされていると言う。X型としては幼少時から体の弱かった話者がカミサマに相談したところ、身代わりになるということでカミサマからもらったものと、身の上を相談したカミサマからもらったもの2対がある。下北半島で見られたY型やZ型に分類されうるものは0対である。分からないとするものは、両親が祀っていたので分からないを含め、2対である。これらの分類に分類できないものが18対ある。この18対が夏泊半島のオシラサマの特徴をなす起源を持つものであり、楠の分類に5)V型として付け加えなければならないものである。それは「サンヅクもの」、「サンヅイたもの」、「サンヅてる」（「授かる」の意味）と表現される「サンヅイた」ものであり、V型として区別しなければならない。楠が下北調査の報告として提示しているオシラサン起源の分類のパーセンテージは昭和40年のものであり、現在（平成17年）と比較するのは問題であるが、参考のために記しておく。下北半島では、「昔から家にあった」W型118対、60%、「イタコからもらった」X型21対、11%、「他家から預かった」Y型11対、6%、「病気をなおすために作った」Z型20対10%、「サンヅイた」V型0対、0%、分からない25対、13%、計195対、100%である。それに対して、夏泊半島では、W型4対、15%（うち、古くからある1対、3.8%）、X型2対、7.7%、Y型0対、0%、Z型0対、0%、V型18対、69.3%、分からない2対、8%、計26対、100%である。下北半島と夏泊半島のオシラサマにおける起源の大きな違いは、W型とV型との違いとすることができる。つまり下北半島のオシラサマは「昔から家にあった」、とされるのに対し、夏泊半島のオシラサマは祀る人が自ら「サンヅイた」もの、という違いである。

オシラサマの起源に関して下北半島と夏泊半島では大きな違いはあるが、信仰対象としてのオシラサマはどのように祀られているのであろうか。これもまた、両半島において大きく異なっているのであろうか。静態的に信仰現象のノエマ（信仰の対象）を観察すると、

夏泊半島と下北半島との違いは、先に見たように、ノエマの起源にしか見られない。しかしながら、信仰現象のノエマとノエシス（信仰の担い手）との関係から動的に見ていくと、言い換えれば、信仰の対象としてのオシラサマをどのような人あるいは人々つまり祭祀集団が祀っているのか、という具体的な現象から見ていくと、そこにはオシラサマの起源に関わる問題や、祀る人あるいは祀る人々に関する問題とともに、イタコあるいはカミサマとの関係から、違いが見えてくることになる。ここでも楠による下北半島におけるオシラ祭祀集団の分類を参照することにする。

楠は信仰集団を類型的に把握するために、

- 1) 同族的女性祭祀集団をA型
- 2) 同族的・地縁的女性祭祀集団をB型
- 3) 地縁的女性祭祀集団をC型
- 4) 講型女性祭祀集団をD型
- 5) 個人的なるものをE型

という5つの類型に分けている。これら5型を簡単に説明すると、以下のようになる。A型とは、「現在の男性戸主によって代表される男系同族を前提とする女性の血縁を主とする祭祀集団である。この祭祀集団によって祀られるオシラサンは、その由来、木偶の形態、外形に関係なく、ノエマとしての座を離れることは稀」(287)であり、むしろ逆に祀る人々がオシラサンの座であるその家に集まって来て、祭りが行われる。B型は、「同族的女性祭祀集団を中心として、これに、村落内の地縁的要素が濃厚に加わっているものである」(287)。とはいえ、A型とB型とを厳密に区別することはきわめて難しい。というのは、居住地が接近している近所の女性がA型のオシラサンの祭りに参加することがあり、この女性が「系譜や血縁上、何処かで、相互に関係している場合が多く」(309)、A型とB型とを實際上、質的に区別できないからである。楠は具体的事例をそれぞれの型に当てはめて両者をきちんと説明はしているが、B型をA型の中に含めて考えることを提案~~を~~している。C型は「血縁関係を中心とせず、近所に住んでいる者の集まりを、地縁的女性祭祀集団と考え」(287)、設定された類型である。D型は、「地縁という関係にこだわらず、比較的広い範囲にわたる有志のあつまり(すなわち、オシラサンの信者たちの集まり)を、講的女性祭祀集団」(287)と見なし、作られた類型である。このD型においては、祭祀集団への個人的な自由参加が強まる反面、血縁や地縁的要素が弱くなる。「個人によるオシラサン信仰である」(288) E型は、当然のことであるが祭祀集団を形成しない。これらD型とE型との違いは、E型の場合には「一人の人が一つのオシラサンを信仰」(288)しており、D型の場合は一つのオシラサンを複数人が信仰している、という点に見られる。このE型の特徴を、楠は「自分の病気をなおすために、病人自身がオシラサンを刻んでもらったり、他人から譲りうけたりするが、その人が他界したり、病気がなおったりすると、他人に譲り渡したりする」(288)、と述べている。このようなA型からE型における類型間

の特徴をさらに楠は記し、それぞれの型の構造分析を行っているが、夏泊半島のオシラサマを考察する際にはあまり参考とはならない。というのも、夏泊半島のオシラサマがA型やB型のような祭祀集団を持っていないからである。ここでは、E型に近い夏泊半島のオシラサマ祭祀を、イタコあるいはカミサマとの関係から見ておくことにする。

浅所のオシラサマを祀っている家では、昭和 35、36 年頃まで、小湊のイタコ・高橋ナヨ（明治 43 年～平成 5 年、津軽三味線奏者・高橋竹山の妻）を 1 月 8 日に呼んで、オシラサマを遊ばせたり、その年の作物の出来や死者の数などを占ってもらったりした。その家のバサマ（おばあさん）はイタコが来ると、遊ばせるから家に来い、と集落の人に知らせた。それを聞いた大勢の人がその家に集まったが、その際、オシラサマを祀っている人はオシラサマを持参し、遊ばせてもらった（東滝でオシラサマを祀っている人もこの家で遊ばせてもらった）。また頼めば占ってもらえたので、集まって来た人々も占ってもらった。白砂のオシラサマを祀るある家では、弘前から来ているらしいイタコを泊め、オシラサマを遊ばせた。その時、その集落のオシラサマを祀っている人がオシラサマを持ってその人の家に集まり、イタコにオシラサマ遊ばせをしてもらった。その時期は 3 月あるいは 4 月であり、35 年から 40 年ほど前まで行われていた。オシラサマ遊ばせが終わると、イタコは口開き（家の誰が怪我をすとか、集落に何が起きるかなどを告げること）をした。その際に集まってくる集落の人々は主に女性であった。東田沢では戦後小湊からお盆の頃イタコが来て、戦死者の霊を降ろし、家族を慰めていたという話を聞くことが出来たが、オシラサマとの関係は聞かれなかった。野内畑のシラガミサマを祀る家では、シラガミサマを祀るようになってから、小湊の原子というカミサマを呼んでシラガミサマを遊ばせてもらっていたが、来なくなってから 20 年以上たつ。来てもらったときカミサマは、シラガミサマを手を持ち、病気をしないように、と家族全員の体をなでたりもした。この話者（大正 15 年生まれ）が若い頃にはイタコが村に来ていた。その際イタコはシラガミサマを祀っている家に集まってきていた年輩の女性に対して、何時何時は気をつけよ、などと占いをした。けれどもイタコとシラガミサマとの関係は不明である。稲生には盲目の女性である「ミコサン」が年に 1 回春か秋に下北の川内から 15 年ほど前までやって来ていた（彼女は今から 5、6 年前になくなった）。ミコサンがやって来ると、その旨を集落中に伝え、オシラサマを祀っている人はミコサンの宿になっている家にオシラサマを持って集まり、ミコサンにオシラサマを遊ばせてもらった。遊ばせが終わると、集まった人々に何月何日は良くない日なので気をつけよ、などという占いを行った（稲生でこの話を聞いたのは 5 年前のことである）。また、オシラサマを祀っている別の家では、平成に入る頃まで、年 2 回春と秋の彼岸に、小湊のイタコ（話者はホトケ降ろしをする人をイタコ、カミ降ろしをする人をカミサマと呼ぶが、この場合は同一人物である）が来ていた。春はホトケ降ろし、秋はカミ降ろしをしてもらうとともに、オシラサマを遊ばせてもらっていた。また、大湊のイタコと縁戚関係にある家では、昭和 17、18 年頃まで、この家にこのイタコがや

って来て、カミ降ろしやホトケ降ろしを行っていた。その時には親戚の女性 10 人ほどが集まってきて、同じくホトケ降ろしをしてもらった。しかしオシラサマを祀っている家の者がオシラサマを持ってくることはなかった。浦田のオシラサマを祀っているある家では、数十年前にはイタコを呼んでオシラサマを遊ばせることがあったが、もはや行われていない。茂浦では、イタコの高橋ナヨのところに行く、あるいは久渡寺に行くと言うことは聞かれたが、イタコが来ていた話は聞かれなかった。

このように見てくると、夏泊半島にイタコあるいはカミサマが一番最近までやって来ていたのは、昭和の終わる頃までイタコが来ていた稲生でも、今から 20 年ほど前のことである。記憶が定かでないことを差し引いて考えても、オシラサマをイタコあるいはカミサマが遊ばせた、という回答をしているところは、茂浦をのぞく、浅所、東滝、白砂、野内畑、稲生、浦田である。そのうちで、オシラサマを祀っている家の人々が、オシラサマ遊ばせのために、オシラサマを持ってイタコあるいはカミサマが泊まっている家に集まってきた、と回答してくれたのは、浅所、東滝、白砂、稲生である。しかしながら、その回答を子細に検討すると、オシラサマを祀っている人がオシラサマを持参し、しかも女性が集まってきた、と回答してくれたのは白砂のみである。浅所と東滝はオシラサマを持参して遊ばしてもらいはするが、集まった人が女性のみであるとは決めかねる。野内畑ではシラガミサマを祀るようになってから、個人的にカミサマに来てもらい、シラガミサマを遊ばせていたことは分かるが、その広がりはない。ただ話者が若いときにはイタコが来ると年配の女性が集まっていたことは確認できたが、オシラサマとの関係は分からない。稲生ではオシラサマを祀っている家によって事情が異なり、オシラサマを祀っている人がオシラサマを持参して集まった、という場合とそういうことはなかった、とする場合とがある。浦田では個人的にイタコを呼んでオシラサマ遊ばせをしたことがあったとされている。以上の話を数値から見ると、イタコあるいはカミサマとオシラサマが関係しているその割合は、オシラサマを祀っている 24 軒中、7 軒であり、29%である。そのうち 1 軒ではイタコは占いにのみに冬やって来ていたとしているので、それを引くと 24 軒中、6 軒で 25%である。オシラサマを祀っている家の 25%であれ、イタコあるいはカミサマがオシラサマを遊ばせた、ということを知ることが出来る。しかしながら、話者たちの話からすると、イタコあるいはカミサマに対して、オシラサマ遊ばせをするか否かよりも、むしろ、オシラサン遊ばせをした後で行われる口開き、あるいは作占や年占などのイタコあるいはカミサマが行う占いに、関心があったように思われる。

楠が下北半島におけるオシラサンの具体的信仰現象を分析することから導き出した分類ならびに特徴と比べて、類似点として、オシラサマ遊ばせに女性が集まる、集まる人々に血縁あるいは地縁関係があるなどと、夏泊半島のオシラサマ信仰を分析することから言うことは困難である。あるいはイタコ信仰とオシラサマ信仰とは別のものであるとか、オシラサマ信仰にイタコ信仰がある時点で関係するようになったとか、はたまた逆に、イタコ



信仰にオシラサマ信仰があるとき関係するようになったとか、というこれらのことを言うには、イタコあるいはカミサマが夏泊半島にやって来なくなってからの時間の壁が大きく立ちふさがっている。したがって、信仰現象の祭祀集団における動態を、下北半島のように、夏泊半島においてとらえることが出来ない、ということである。ただ楠の分類から見ることが出来るのは、オシラサマの祭祀に関して、夏泊半島のそれは、下北半島のそれとは異なっている、ということである。言い換えれば、夏泊半島でよく聞かれるのは、久渡寺へオシラサマを連れて行って遊ばせた、ということであり、下北半島の祭祀よりは、むしろ津軽半島のものに類似しているように思われることである。それも、夏泊半島のオシラサマの起源に、つまりサンヅクことに関係があると思われる。次に、夏泊半島におけるオシラサマの起源であるサンヅクことについて具体的事例を見ていくことにする。

### 3. オシラサマをサンヅク事例

夏泊半島のオシラサマ信仰を特徴づけるものは、なんとと言っても「サンヅク」ことである。サンヅクとは授かるの意味であるが、その授かり方はいろいろである。具体的な事例を紹介することにする。

#### 1 大正 15 年生まれの女性

40 才ぐらいの時、シラガミサマの夢を見た。気にせずいたところ、山仕事の最中に大怪我をした。ところが大事には至らず、治りが早かったことから、シラガミサマを祀らなければならないと思った。そこで、自分の田んぼの傍にあった、幹の途中で枝分かれをし交差した桑の木を、青森市の堤橋近くに住む人のところに持って行って、シラガミサマを作ってもらった。

#### 2 大正 10 年生まれの女性

50 才ぐらいの頃、正月 2 日に馬の夢を見た。その内容とは、話者が馬屋の前を通ろうとしたら、馬が頭をがぶりと噛み付いた、というものであった。この話を村人が集まる席で話したら、馬の夢はオシラサマが授かるお告げだ、と言われた。ほどなくして、話者は畑の近くの沢で、交差した桑の木を見つけた。その木の交差している部分を前後 15 センチメートルほど切り取って(都合 30 センチメートルほど)、川内の蛸崎村の仏具屋さんでオシラサマに作ってもらい、高橋竹山の奥さんに魂入れをしてもらった。

#### 3 大正 15 年生まれの女性

昭和 30 年代の初め頃、ある日のこと、オシラサマが夢枕にたって、ある場所に行きなさい、と言った。言われたとおりその場所へ行くと、別々に生えた 2 本の木の幹が途中で合わさって、1 本になっている桑の木があった。話者はその木を切り取り、青森市の堤川近くに住むオシラサマを彫る人に頼んでオシラサマを作ってもらった。

#### 4 大正 13 年生まれの女性

話者は 20 代から 40 代にかけて、馬が鈴を鳴らしながら歩き、その脇を自分も歩く、と

いう夢をよく見た。そこでカミサマに拜んでもらうと、「シラカミサマを授かることになっている。畑の坎の木から削って像を造り、それを祀れ」、と言われた。そこで、山にある畑の傍で見つけた絡み合った2本の坎の木を、2、3年小屋で乾燥させた後に、青森で、馬頭を持つ男性と女性にしつらえてもらい、オシラサマを作ってもらった。男性に仕立てられた木は太くてがさがさとしているが、女性に仕立てられた木はすらっとして滑らかである。作ってもらったのは1970年代頃の話である。

#### 5 昭和16年生まれの女性

25年ぐらい前、オシラサマの夢を見た。夢に現れたオシラサマが、「私に赤い着物を着せてください」、と言った。そこで、自分の家の裏に生えていた坎の木からオシラサマ2体を大野の人に頼んで作ってもらい、女のオシラサマには夢で言われたとおりに、赤い襦袢を着せている。

#### 6 大正7年生まれの女性

ある日のこと、夢にオシラサマが現れた。オシラサマは白い着物を着ているように見えた。夢を見た数日後、話者は病気にかかってしまい、青森のカミサマに拜んでもらうと、「オシラサマを祀れ」、と言われた。現在ではカミサマの言うとおりに、毎月16日をオシラサマの縁日として祀っている。

#### 7 大正12年生まれの男性

話者は自宅の前に桑の木を植えた。植えた理由は、雷が鳴ってもカンコ（桑）の葉を家の中に入れると、「神様おっかなくない」、と言われていたためである。約40年ほど前、話者は鈴の音の夢や体中に蚕がつく夢を毎日見るようになった。そのことを青森のカミサマに告げると、シラガミサマが授かる、と言われた。しかしその頃には、自宅の屋根の高さまで伸びた、二股に交差していた桑の木は、枯れてしまっていた。その後しばらくすると、きれいな姫様と馬の顔をした立派な若者とが二人して夢枕にたち、「記憶のある山に来い」、と告げた。心当たりがあり、青森市滝沢の月光の滝近くへ行くと、そこには交差した桑の木があった。それを青森市の木地屋に持って行き、彫ってもらって、オシラサマを作った。

#### 8 昭和3年生まれの女性

昭和50年頃、早朝2時に夫と二人して塩釜神社へお参りに行く途中、ちょうど村の中心部あたりで鈴の音を聞いた。猫かとも思ったが、この辺りでは猫の首に鈴をつける家はないので、不思議に思っていた。その後、夫が、自分の畑にオシラサマになる木が生えている夢を見た。その夢を見てから、畑に行ってみると、夢で見たとおりの木が生えていた。青森市大野のカミサマに聞いたところ、「あなたほどの信仰がある人であるならば、自分でオシラサマを作って良い」、と言われた。そこで夫がその木から一對のオシラサマを彫った。それをカミサマのところへ持って行ったが、オシラサマの顔の区別がつかなかったので、カミサマが男女の区別をつくように顔を整えてから、着物を着せてくれた。

#### 9 大正4年生まれの女性

話者が幼い頃、家の近くにカンの木が生えていた。話者は、その木を毎夜夢に見るようになったので、父にその木をもらいたい、と話した。話者がその木を切ろうとして、木の生えているところに行ってみると、その木はすでに切られてなくなっていた。その木は、隣の家のおさんがカミサマに言われてオシラサマを探していたので、実家を継いだ兄が切ってその奥さんにあげてしまっていた。その後もそのような木を探していたが、40才くらいの時に、30センチメートルほどの間隔で並んで生えている2本のカンの木が交差しているのを見つけた。その木を持って青森に連れて行ってもらい、その木からオシラサマを作ってもらった。

#### 10 大正15年生まれの女性

30年ほど前、不思議な夢を見た。その夢とは次のようなものである。夢の中で誰かに「シラカミサマここにいるぞうー」、と声をかけられた。その人は、話者の家からオシラサマのいる場所までの道筋を、ここには川が、そこには田んぼが、という具合に詳しく示してくれた。夢を見た翌日、言われたとおりに歩いていくと、そこにはカンの木が生えていた。その木からオシラサマを作ってもらった。

#### 11 大正5年生まれの女性

昭和45年頃、畑に行く夢を見た。夢の中で畑に着くと、「ここから1000メートル行った川にいる」、と言う声が聞こえ、自分の周りをイルカの形をした石が空中を飛んでいた。それから3日後、夢で見たのと同じ形の石を墓所近くの川で見つけた。その石を家で祀るようになった4年6ヶ月後、突然その石が見あたらなくなってしまった。話者は不安に思い、小湊のカミサマに話を聞きに行ったところ、「外にいて働いているから心配ない」、と言われた。話者は代わりの神様を作ってもらおうと、青森市大野にいるカミサマのところへ木を持っていたが、生木であったので、カミサマがその場で乾燥した木と取り替えて、シラガミサマを作ってくれた。

#### 12 昭和2年生まれの女性

約50年ほど前、話者は田へ仕事に行く途中で、カラカラとなる鈴の音を聞いた。カミサマに拜んでもらうと、「それはシラガミサマだから、像を造ってお祀りしなさい」、と言われた。そのカンの木はよその畑に生えていたため、自分の分とその人の分とを作ってもらった。

#### 13 昭和5年生まれの女性の親戚

仕事に行く途中、川のそばで太鼓の音が聞こえることがよくあった。そのことをカミサマに聞きに行ったところ、「それは神様が授かったのであろう」、と言われたため、音のする方へ行ってみると、交差している2本の桑の木があった。適当な太さであったので、その木から何対かのオシラサマを作った。その一対を話者の母が昭和15、16年頃、もらい受け、祀っている。

#### 14 大正14年生まれの男性

31歳の時、白砂の山へ炭焼きに行った。その山にはカンの木がたくさん生えていたが、ある日のこと、カンの木を鉋で切っていると、2本の木がよじれて上方で一つになっている木が目にとまった。外見は他の木と変わらないが、話者にはどこか違うように思われた。その日に切った木々は、皆よじれた木の方を向いて倒れた。次の日、そのよじれた木を切り倒してみると、幹の内側が黒紫色をした紫カンの木であった。この木を家に持ち帰り、オシラサマを彫ってもらった。

#### 15 昭和9年生まれの男性

30才の頃、田んぼの脇にカンコの木が2本交差して生えているのを見つけた。この木を切って知人から紹介された年老いたカミサマに魂入れをしてもらい、シラガミサマとして祀るようになった。

#### 16 大正8年生まれの男性の妻（故人）

畑のそばの水が流れているところで、交差する2本の桑の木を見つけ、ありがたいオシラサマの木であるとして、青森市でその木からオシラサマを作ってもらった。

#### 17 昭和2年生まれの女性の姑

姑が、ねじれて一つになっている桑の木を見つけてサンヅいたものである。何時どこでサンヅいたか詳しいことは分からない。

#### 18 昭和4年生まれの男性と昭和8年生まれの女性

昭和58年頃、カミサマをやっている人から、家の畑に、沢の両側から生えて交差している桑の木があることを指摘され、「おまえたちにオシラサマ、サンヅイている」、と言われた。そのような桑の木を放置し粗末にしておいてはいけないので、その人にオシラサマをこしらえてもらい、家で祀るようになった。その人は青森市の郊外にいるある人のところに木を持って行き、オシラサマを彫ってもらったらしい。この家では、男のオシラサマには青色の、女のオシラサマには赤色の布を青森駅近くの市場で買い、白い着物の上に着せている。

#### 19 大正10年生まれの女性

幼い頃から体が弱く、青森市石井のカミサマに相談したところ、「身代わりになる」、としてオシラサマをもらい受けた。このオシラサマを大切にお祀りしていたが、このオシラサマをつれて久渡寺にある時お参りをした。その時たまたま居合わせたカミサマから、「体の弱い話者の体を受け取ってしまっているから、取り替えた方がいい。このオシラサマはもう弱ってしまっている」、と言われ、久渡寺に祀られていたオシラサマと交換してもらった。交換してもらう時に和尚が、オシラサマに魂を入れるために、祈祷を行った。このオシラサマを現在祀っている。

#### 20 大正5年生まれの女性

話者の姑が連絡船で青森に行ったとき、カミサマに出会った。カミサマに、働いても働

いても金がなくて食うに困っている、と言ったら、カミサマがシラガミサマを授けてくれた。このシラガミサマを話者も祀っている。

これらは夏泊半島におけるオシラサマ 26 対中、オシラサマの起源に関してはっきりしているものを、サンヅいたもの 18 対、イタコあるいはカミサマからもらったもの 2 対について、事例 1 から事例 20 までとして掲げたものである。サンヅいたものは、先にもパーセンテージを示しておいたが、全体のほぼ 70 % である。これらほぼ 70 % のオシラサマがそうであるように、サンヅクことが夏泊半島のオシラサマの特徴をなしている。しかし、サンヅクというこの特徴を子細に見ていくと、またそこにはいくつかのパターンがあることが分かる。事例 1 から事例 11 までは、オシラサマに関する夢を見てオシラサマをサンヅクものである。事例 12 と事例 13 は、カミサマの関与があるとはいえ、鈴の音を聞くことでオシラサマをサンヅいている。事例 14 から事例 17 までは、交差している桑の木を見つけ出すことから、言い換えれば、交差している桑の木を「オシラサマになる木」と認めることから、オシラサマをサンヅいている。事例 18 は、カミサマに本人たちがオシラサマをサンヅいていることを指摘され、オシラサマをサンヅいている。事例 19 と事例 20 とはカミサマがオシラサマを授けてくれている場合である。これらのパターンをパーセンテージで見ると、夢を見てサンヅク場合が起源の分かるもの 20 対中 11 対で、全体の 55 % であり、音を聞くことは 2 対、10 %、交差した桑の木を発見が 4 対、20 %、カミサマに言われるが 1 対、5 %、カミサマにもらうが 2 対、10 % である。

夢であれ幻聴であれ、何らかの暗示からオシラサマがサンヅク場合は、サンヅク場合 18 対中の 13 対、72 % となり、全体の 4 分の 3 に当たる。この点にこそ、下北半島のオシラサマには見られない夏泊半島におけるオシラサマ独特の特徴がある。またこれら何らかの暗示を受けた後に、つまり夢を見た後に、あるいは音を聞いた後に、その夢の内容あるいはその音の意味をカミサマあるいは村人などに尋ね、オシラサマを祀るようになったものは、事例 2、事例 4、事例 6、事例 8、事例 11、事例 12、事例 13 であり、13 対のうち 7 対であり、54 % にあたる。事例 2 は村人に話してオシラサマを祀るようになった場合であるが、それ以外はカミサマに拝んでもらったものであり、カミサマに尋ねたものとしては 13 対のうち 6 対であり、46 % である。また、カミサマとオシラサマを祀ることとの関係で言えば、事例 4、事例 6、事例 8、事例 11、事例 12、事例 13 のほか、事例 18 (カミサマがサンヅいていることを教える)、事例 19 (カミサマがオシラサマを授ける)、事例 20 (カミサマがオシラサマを授ける) の 3 例も該当し、20 対のうち 9 対、45 % がカミサマと関係していることになる。事例 1、事例 3、事例 5、事例 7、事例 9、事例 10、事例 14、事例 15、事例 16、事例 17 は、オシラサマの夢を見たり、夢で桑の木のある場所を示されたり、あるいは偶然にであれ、交差したカンの木を見つけたりした事例であるが、いずれの場合でも、オシラサマがサンヅいたことを知り、オシラサマを祀るようになった例である。これらの例は起源の分かるもの 20 対のうち 10 対、50 % にのぼる。馬の

夢を見たことを村人に話したところ、オシラサマが授かるお告げだとした例である事例2をカミサマと関係しないものとして含めれば、20対のうち11対、55%である。すると、夏泊半島におけるオシラサマの起源の分かる事例20対のうち11対がカミサマと関係なしに祀られ、残り9対がカミサマと関係していることになる。しかしながら、注目すべきことは、夢であれ、交差したカンの木を見つけたことであれ、オシラサマを祀るようになるきっかけはともあれ、半数の事例において、自らオシラサマをサンヅいたとして祀っている事実である。夏泊半島の人々が、交差したカンの木はオシラサマになる木、とする知識をどこから獲得したののであろうか。オシラサマ遊ばせにイタコあるいはカミサマがやって来ていた昭和の終わり頃までに、彼女らが占いを聞きに来た人々に、オシラサマをサンヅク話をし、人々に周知のこととなっていたのであろうか（高橋ナヨはオシラサマを遊ばせる際に、必ずセンダクログを唱え、その後口寄せを行った）。それとも、オシラサマをサンヅいた人々が自らの体験を話し、当然の話と人々が心得ていたのであろうか。あるいは50年ほど前まで浅所に来ていたという説教僧であらうか。しかし浅所でのみ聞くことが出来た説教僧がその原因である可能性は、夏泊半島全体にとってはきわめて低いと思われる。すると、一番最初にサンヅいた人はどちらであったのであろうか。平成の今となっては、どちらであるか、当然のことながら確かめることは出来ない。歴史的に起源を追求することは出来ないけれども、夢や音の意味をカミサマに尋ねることから、オシラサマをサンヅいたことを知る人々が半数いることからすると、カミサマがサンヅクことに関係していることは間違いのないことである。むしろ、カミサマがサンヅクことの一因になっていた、と思われる。その意味で、カミサマが夏泊半島のオシラサマ信仰を生み出している、と言うことが出来る。逆に、このような関係から夏泊半島に、交差したカンの木がオシラサマになる木である、という知識が広まった可能性が高いように思われる。こうした意味で、夏泊半島におけるオシラサマ信仰へのカミサマの関与を指摘することは可能である。

#### 4. 夏泊半島におけるオシラサマの特徴

サンヅクことが夏泊半島におけるオシラサマの特徴であるが、サンヅいたオシラサマはそれぞれの家でどのように祀られているのであろうか。先に見たように、オシラサマ遊ばせをイタコあるいはカミサマが行っていたのは、一番最近でも昭和の終わり頃までであり、それも全体の25%であった。すると、平成の今では何も行われていないように思われてしまうことになる。けれども、オシラサマを祀っている家では、毎日ご飯と水とを供えている家が多い。24軒中、11軒で毎日欠かさず行われ、そのうち1軒ではご飯と水のほかに塩も供えるという。毎日のお供えとは別に、オシラサマの日である16日にお酒も供えるという家が1軒あった。たまにお酒を供える家が1軒ある。またお菓子を供えたり畑でとれたものを供えるという家もあった。毎日のお供えをする際に、オシラサマに「今日一

日事故なくお守りください」とか「事故に遭わないように」とか拜んだりする、と言う人もいる。これら 11 軒の家とは別に、何かあるとき、お菓子や餅を供えてオシラサマを拜む家が 1 軒あった。

日常にお供えをしているほかに、オシラサマをお祀りする場合がある。それが弘前市にある久渡寺に行くことである。オシラサマを祀っている 24 軒の家で、オシラサマを久渡寺に連れて行ったことがあるかと聞いた際、あると答えた家は 16 軒あり、全体の 66.7%にあたる。久渡寺に行ったことのあるこれら 16 軒のうち 2 軒をのぞいて、14 軒はオシラサマをサンヅいた、と答えた家である。サンヅいたと答えた家の総数は 24 軒中 17 軒であり、サンヅいた本人が死亡している家が 2 軒あることからして、14 軒という数字は極めて高いものであり、ほぼ全戸が久渡寺に行ったと考えても良いものである。つまりサンヅいた本人がオシラサマをお祀りしている 15 軒のうちの 14 軒であり、数字的には 93%にあたる。のぞいた 2 軒のうち 1 軒はカミサマからオシラサマをもらった家であり、他の 1 軒は両親が祀っていたので分からないとした家である。また誰と行ったか、という質問に対しては、サヅかった本人が一人で、オシラサマを祀っている親戚同士の女性 3 人が誘い合って、親戚に誘われて、同じ集落に住むオシラサマを祀っている人同士誘い合って、という回答を得た。久渡寺に行くとオシラサマに掛ける勲章がもらえ、久渡寺に行く回数が重なるたびに勲章は大きくなる、という話や、久渡寺でオシラサマのオセンダクをしてもらう（オシラサマの衣裳キンダンを着せ替えてもらう）という話は聞かれたが、そこでどんなことを祈るのか、あるいはどんな占いがあるのかは聞き損ねた。久渡寺に行くのは何時かという話では、1 軒でのみ 6 月 15 日頃という日時を聞き出せたが、その他は年に 1 回とか 3 回とか、以前は二ヶ月に一度とか、今まで何回行った回数のみで日時は特定できなかった。なかには、久渡寺に行った時にはオシラサマを持ってきている人が大勢いたなどという話から、久渡寺で「オシラサマの祭り」が行われる 5 月 15、16 日であったのではないかと推測される場合もある。それはあくまでも推測でしかない。このように日時特定が困難であるのは、一つには、誰かが連れて行ってくれるならば久渡寺に行きたい、という話に見られるように、オシラサマを祀っている人々が高齢化し、近年久渡寺に行っていないことが原因であるかとも思われる。ちなみに平成 8 年がもっとも最近に久渡寺へ出かけた場合である。

オシラサマを久渡寺へ連れて行く夏泊半島の人々は、楠の言う「津軽の E 型オシラサン信仰」(401) とどのような関係にあるのであろうか。楠によれば、「津軽の E 型オシラサン信仰」にはゴミソが祀るオシラサンとイタコの祀るオシラサンとがある。ゴミソは「何らかの理由で、自分の病気を治すために、オシラサンを祀っている」(391)。それに対し、イタコは「村や家に祀られているオシラサンの祭りに参加して、そのオシラサンを祀る」(390)。夏泊半島のオシラサマは見てきたように、どちらかといえば、個人的なものという意味でゴミソが祀るオシラサンに類似している。しかし、病気直しを祈る信仰のノエマ

としては、夏泊半島のオシラサマはとらえられていない。夢を見たり音を聞いたり、あるいは交差しているカンの木を見つけたりしてサンヅいたオシラサマに対して、一日の無事を祈ったり、火事の時働く神様と考えたりすることはあれ、病氣直しを祈る信仰のノエマとしてはとらえられていない。この点は、津軽半島のオシラサマと夏泊半島のオシラサマとで大きく違うところである。また異なっている点としては、津軽半島のオシラサンはゴミソやイタコが祀っているが、夏泊半島のオシラサマではそうしたことはなく、サンヅいた人が基本的に祀っていることをあげることが出来る。また、夏泊半島では、例えば高橋ナヨをイタコと呼んだりカミサマと呼んだりしていて、学術用語としてのイタコとゴミソのように明確に区別することは出来ない。けれども、夢や音の意味内容を判断してもらう人はつねにカミサマと呼ばれてはいる。このカミサマの働きに相当するものは津軽半島のイタコにもゴミソにも見られず、夏泊半島におけるオシラサマ信仰の特徴である。これらにおいて大きく異なる両半島のオシラサマも、しかしながら、形態的には同じである。つまり夏泊半島のオシラサマは、ゴミソやイタコが持つ「久渡寺型のオシラサン信仰」(389)のノエマとして、久渡寺のお祭りの際に集まってくるオシラサマと同じであり、豪華できらびやかな衣裳キンダンをまとっている。夏泊半島のオシラサマの大きさを先に 30 センチメートル(1尺)ほどと述べたが、それはカンの木の部分であり、カンの木にパイプを継ぎ足すなどして、1メートル(3尺)ほどにしているものもあり、キンダンを纏ったオシラサマの身長は両半島において基本的に変わらない。両半島において、形態的には変わらないオシラサマも、その信仰を形成するにあたっては大きな違いが見られる。

以上見てきたように、下北半島、夏泊半島そして津軽半島のオシラサマは、養蚕神や農神でも教典神・経典仏でもない信仰のノエマであるが、その形態はいずれの半島においても 30 センチメートル程度のものであった。この点のみが下北、夏泊、津軽といった三半島に共通するものである。夏泊半島のオシラサマはキンダンを纏った包頭型のオシラサマであり、衣裳から見れば、下北半島のオシラサマよりも津軽半島のオシラサマに近いものである。下北半島のオシラサマは女性祭祀集団により祀られているが、夏泊半島と津軽半島のオシラサマは祭祀集団ではなく個人によって祀られている。イタコあるいはカミサマがオシラサマ遊ばせにやって来たときでも、下北半島でのような女性が中心となって祀るという特徴は、夏泊半島では見られなかった。祀られているオシラサマは下北半島においては古くから家にある、というものが中心であるが、夏泊半島のはサンヅいた結果、祀られるようになったものであり、女性の方が男性より多くサンヅク例が見られはするが、オシラサマをサンヅクのも祀るのも女性に限られるわけでもない。このサンヅクということが、夏泊半島のオシラサマ信仰を特徴づけるものであることは言うまでもない。また、夏泊半島のオシラサマ信仰では、津軽半島のオシラサマ信仰のように、病氣直しを祈るノエマとすることは無い。オシラサマを祀る人々は、下北半島ではイタコの関わりがあるとはいえ職業的宗教者が中心ではないし、夏泊半島では基本的に、サンヅいた人がオシラサマ



を祀るのであり、職業的宗教者ではない。それに対して、津軽半島ではイタコやゴミソという職業的宗教者がオシラサマを祀る。このように下北半島、夏泊半島そして津軽半島のオシラサマ信仰の違いを挙げる事が出来る。こうした特徴の中で夏泊半島のオシラサマ信仰の特徴は、下北半島や津軽半島のオシラサマ信仰に見られないサンヅクがそれである、ということが出来る。この特徴こそが夏泊半島のオシラサマ信仰におけるイタコやカミサマへの関わりや祭祀集団への関係を規定し、下北半島や津軽半島におけるオシラサマ信仰に見られない独特で、中間的な信仰を形成しているのである。

長期間にわたる調査を快く受け入れてくれた夏泊半島の人々と、資料を共有させてくれた弘前大学人文学部宗教学民俗学実習履修生ならびに愛知県立大学文学部日本民俗学ゼミナール生に感謝申し上げます。なお、資料は実習レポートや筆者が見聞したものを利用したため、弘前大学人文学部宗教学民俗学報告書Ⅱ『夏泊半島の宗教と民俗』と同Ⅲ『夏泊半島における宗教民俗誌』からの引用は行わなかった。

#### 註

- (1) 『平内町史』下巻、平内町役場刊、昭和52年、p.928。
- (2) 『菅江真澄全集』第3巻、未来社刊、昭和47年、p.11-18。
- (3) 楠正弘著『庶民信仰の世界』、未来社刊、昭和59年。